



江名のタブ林

指定 昭和六十三年三月二十五日

所在地 いわき市江名字走出

所有者 個人

江名港北東裏山の太平洋に突出した岬に、クロマツ林に混じってタブ林がある。この林は太木でないが、樹高一五m前後のタブノキが濃密に成育するため、林内は照葉樹林特有の薄暗さと湿気を含んでいる。林床は光量が少ないので植生は貧弱だが、マルバグミ、アオキ、シロダモ、ヒサカキ、トベラ、ヤブツバキ、ベニシダ、アイアスカイノデ等が生育し、いわき地方における照葉樹林の典型的な林相となっている。林縁の海崖部にはラセイトイソウ、ツワブキ、ハマギクなど暖寒両系の植物が混生して、照葉・夏緑両林接触域の特徴を示している。土地の人は冬でも霜を見ないという。

タブノキは関東以西に多く生育し、土壌が深く湿潤な土地を選ぶため、海岸平地や谷筋の急崖地によく生育する。太平洋側の自生地は岩手県三陸海岸に及ぶが、いわき市内では海岸に近い地域の堆積地や夏井川河口付近のクロマツ林の中で生育し、赤沼・六十枚・藤間付近では屋敷林として利用されている。海岸地域ではたいいトベラ、マサキ、マルバグミ、暖地性シダ類を伴う。

この自生地は、岬のため気温の年較差が少なく湿気が多く、タブノキの生育に好適な条件をそなえている。江名地区海岸の原植生の一部とみることができる。

岬の樹木の樹冠部は強い潮風があたりるので、内陸側になびいて偏状木になっている。



みなみかわせきさんしゅつち
南沢化石産出地

指定 平成元年三月二十五日

所在地 いわき市大久町小久字南沢

所有者 いわき市

この地点に見られる地層は、双葉層群玉山層の上部層で、堆積した時期は中生代白亜紀後期である。

地層は、礫質砂岩・中細粒砂岩・砂質泥岩とそれらに挟まれた低品位の石灰層から構成されている。

これらの地層は、河口に近い入り江のような、波静かな環境で堆積したものとみられている。

化石は主に低品位の石灰層及び、それに接した部分から採取される。

これまでに採取された化石の中で注目されるものには、小型の竜脚類・草食恐竜の歯化石(鈴木千里・滝沢晃採取)、カメ類の甲羅の一部やコハクなどで、コハクには昆虫化石が含まれている物も少なくない。

中生代の昆虫化石が含まれているコハクの産地として知られているのは、久慈や銚子などわずかな地域であることから見て、この地域のコハク包有層は貴重である。

これまでに明らかにされた昆虫化石は、被子植物に適応した現代型の昆虫とみられるものが主流を占めていて、現代型の昆虫の系統を知る貴重な資料になっている。

この地点は、今後の調査によってはコハクに限らず恐竜類や初期哺乳類化石の採取も期待される。



東松院のモミ群

指定 平成三年三月二十八日

所在地 いわき市川前町下桶売字久保田

所有者 東松院

モミは中間温帯林の代表的樹木で、阿武隈山地のブナ帯下部に自生する。海拔五〇〇mにある東松院裏山には、約三〇本のモミの巨木群があり、これほどの巨木のモミ群は市内では見られなくなった。中でも「夫婦樅」と呼ばれるものは単体としても稀な巨木である。雄モミは推定樹齢約六〇〇年、樹高三七m、胸高幹周り五・三四m、雌モミは樹高二六m、胸高幹周り二・六七mあり根部でつながっている。

モミはマツ科モミ属の日本特有の常緑針葉高木で、幹は直立し、高さ二〇〜四〇m、胸高幹周りは三m以上になる。樹皮は暗灰色で、鱗片状にはがれる。若木の葉の先端は二裂する。雌雄同株で開花は五月頃、円柱形で直立した球実は十月頃灰褐色に熟す。深根性で適潤な肥沃地と日陰を好む樹である。

いわき市の植生は、太平洋側の低地(海拔二〇〇m)は照葉樹林の分布する暖帯に属し、海拔七〇〇m以上の山地帯上部は夏緑樹林の生育する温帯(ナ帯)となり、その中間の山地帯下部が中間温帯林(阿武隈山地ではモミ・落葉広葉樹林となっている。宮城県南部から八茎・小川・田中・長野の北アルプス山麓まで帯状に延びている。

瑠璃光山東松院は、桶売の館主新妻弾正少弼が明徳元年(一三九〇)に開いたと伝えられ、「夫婦樅」は創建の頃から寺を見守ってきたであろう。平成元年に遊歩道「観音山モミの道」が設置され一般に公開されている。



みづもりけいこく
三森溪谷のアカヤシオ自生地

指定 平成三年三月二十八日

所在地 いわき市大久町大久

所有者 林野庁

アカヤシオはツツジ科ツツジ属の落葉低木で、花崗岩や緑泥片岩などの土壌が浅く、やや酸性の岩塊露出地を好んで生育する傾向がある。

三森山のアカヤシオは、地元ではボケと呼ばれ愛されている。この種には三変種が知られている。このうちアカヤシオは滋賀県から福島県までの温帯下部をベルト状に分布し、北限は南相馬市原町区の新田川溪谷である。他の変種であるアケボノツツジは四国・紀伊半島に、ツクシアケボノツツジは九州に分布し、三変種がすみ分けている。学名上の母種はツクシアケボノツツジである。ツツジの仲間は新生代第三紀に出現し、第四紀ウルム氷期以後、暖地系植物と寒地系植物のせめぎ合いの中で種の分化が起り、温帯下部に分布を広げたのがアカヤシオである。

いわき市では、夏井川溪谷やニッ箭山などアカヤシオの名所がある。アカヤシオの花柄には開出する長い腺毛が密生し、長い雄しべの基部には軟毛が散生、短い雄しべの下半分には軟毛が密生する。アケボノツツジは花柄が無毛で、長い雄しべの基部も無毛であるので、この形質に注意すれば区別は簡単である。実生で増えるが成長が遅く、開花まで長い年月を必要とする。開花期は四月中旬から下旬で、満開になると山肌を淡桃色に染める。市の花であるツツジ類の代表的な花である。



内倉湿原

指定 平成三年三月二十八日

所在地 いわき市小川町上小川字沼

所有者 個人

湖沼は、長い年月のあいだに土砂の流入や、水生植物の繁茂によって沼沢化し、湿原の時代を経て、しだいに森林へと遷移してゆく。その過程で水生植物の根茎集団や、泥炭塊が浮上して浮島となり、あらたにさまざまな植物が繁茂し、あたかも土壌に直接発達した湿原のようにみえる場合がある。内倉湿原はこのような湖沼陸化の過程で成立した浮島状の特殊な湿原であり、学術的価値の高い天然記念物である。

浮島は無機養分に乏しく、弱酸性の池水によって常に過湿状態にあるため、腐植が生じやすく、身近にある富栄養の湿地とは異なった植物が生育する。そのよい例は、ムラサキミミカキグサとモウセンゴケである。これらは特殊な捕虫器官によって微小動物をとらえて消化し、自らの栄養とすることのできる植物で、水生のタヌキモとともに食虫植物と呼ばれている。浮島上には、このほかサギスゲ・コイヌノハナヒゲ・アギナシ・オオミズゴケなど貧栄養の湿地に特徴的に出現する植物が生育している。

わずかな開水面にはオヒルムシロ・ヒツジグサ・イヌタヌキモなどの水生植物が生育し、かろうじて沼としての名残をとどめている。

内倉湿原には、植物ばかりでなく、オオルリボシヤンマのような高地を主分布域とする昆虫も生息しており、同様の分布域を持つ前出のサギスゲと合わせて、生物地理学上興味深い要素が含まれている。



藤原のヤマナシ

指 定 平成五年三月二十六日

所在地 いわき市常磐藤原町字別所

管理者 いわき市

藤原町別所は湯ノ岳山麓の東南にあり、古くはアカガシの山があったという。昭和初期に舟材として伐採されたが、今もスダシイとアカガシが残されており、潜在植生が照葉樹林である証となっている。

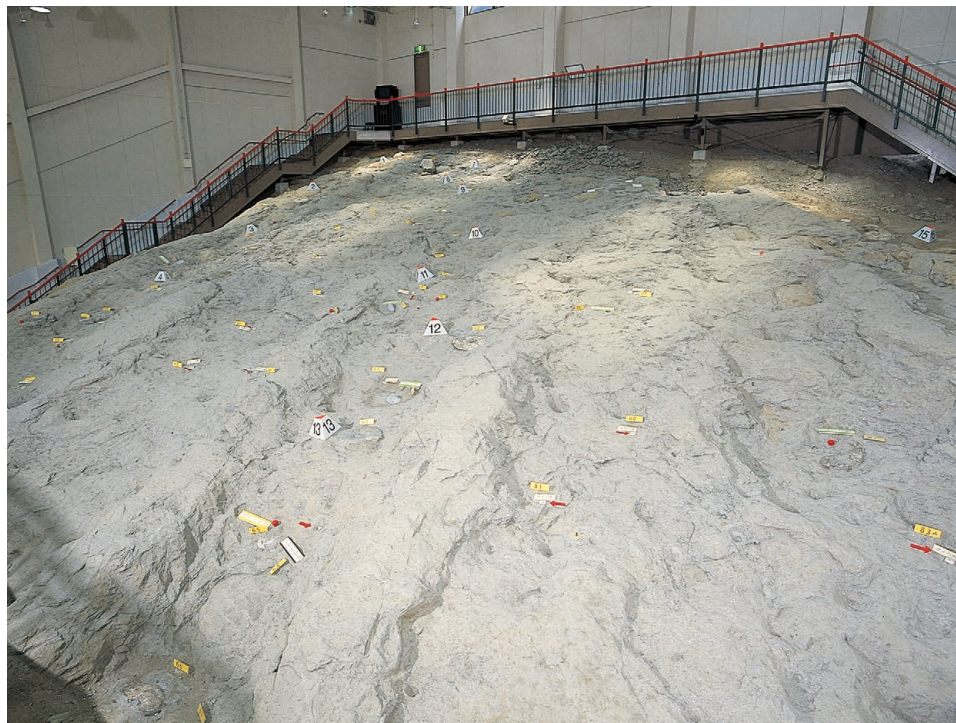
藤原のヤマナシは南向きの畑にある独立樹で、樹高一三m、胸高幹周り一・七二mで、いわき市のヤマナシでは最も大きなものと思われる。

ヤマナシは現在の栽培ナシの原種と考えられている。昔から日本に自生していたかも知れないが、古代に朝鮮から食用として伝来した可能性も否定できない。果実は大きさに変異が多く、小さいものから大きなものでまちまちであるが、藤原のヤマナシは、径五〜八cmの大きさで、西洋ナシ形で萼片が後まで残る。萼片が残る形質はイワテヤマナシに似ているが、池谷祐幸博士（農林水産省）の研究により、ヤマナシでも萼片が残るものもあることが判明しており、本樹もヤマナシの一種であると考えられた。

ヤマナシはバラ科ナシ属の落葉高木で樹皮は褐黒色で不整に裂け、葉は卵円形で薄く縁に芒状鋸歯があり、長柄をもって互生する。花は四月頃、五弁の白い花が散房状につき、雄ずいは二〇本ある。果実は霜の降りる頃、赤味を帯びて熟す。

このヤマナシは、凶作の時の食糧として、また、旧御斉所街道を旅する人達の道標として利用された歴史もある。

救荒植物としての利用がなくなり、多くのヤマナシが伐採されている現在、このような巨木は貴重である。



アンモナイトセンター内化石包蔵地^{（いわき市指定天然記念物）}

指 定 平成五年三月二十六日

所在地 いわき市大久町大久字鶴房

所有者 いわき市

この付近に分布する中生代白亜紀後期の足沢層は、東にゆるく傾斜し、多数の化石を含むことで知られている。

アンモナイトセンターは、この化石層の水平方向の広がりとは化石の埋没状態を直接観察する目的で建設された。

我が国のように地層の変位の激しい地域では、かなりの広さにわたって地層の水平方向（堆積面）を観察することができる場所はなく、化石層に限れば稀有といえることができる。センター内の露頭は、化石密集層の成因や、古環境の検討に貴重な資料の提供が期待される。

この建物内の露頭では、メソプゾシア・アピオトリゴニアなど多数のアンモナイト類とともに、恐竜のハドロサウルス類の脊椎（首の骨）・爬虫類のプリオサウルス類・モササウルス類の歯化石、魚類ではサメ類（フティコドウス・スクアリコーラックス・ヘキササカス）や、新種と見られるギンザメ・エンコードス類、さらに甲殻類のハコエビ類やザリガニ類などが発掘されている。



大國魂神社社叢
おおくにたまじんしゃしやまう

指定 平成十年四月十日

所在地 いわき市平萱波字宮前

所有者 大國魂神社

大國魂神社の社叢は、スタジイ・アカガシ・モチノキ・ヤブツバキ・ヒサカキ・ユズリハなどの常緑樹を主として構成され、スタジイ・アカガシ・タブノキなどの大径木が多数存在する。

スギやヒノキなどが植栽され、やや人手が加えられているが、いわき市の海岸に近い丘陵地帯の潜在植生の面影を残す林として貴重である。林の構成は、高木層にはスタジイ・アカガシ・モチノキがみられ、亜高木層にはヤブツバキ・モチノキ・イロハモミジ・ヒサカキなどが、低木層にはヤブツバキ・ユズリハ・スタジイなどが出現する。草本層にはテイカカズラ・ベニシダ・マンリョウ・シロダモ・アオキ・モチノキ・カヤ・ヤツデ・ヒカゲスゲ・ミヤコザサ・ヤマイタチシダ・トラノオシダなど種類数が多い。この社叢内にはビナンカズラ・イタビカズラ・マンリョウ・ムベなど福島県浜通り地方を北限とする種が含まれ、植物地理学上貴重である。他に宮城県まで北上する種が、当地がほぼ北限に近い種として、トキリマメ・ヤツデ・スタジイがある。

正面の大杉は神木とされ「厄除け杉」といわれ、信仰を集めている。落雷の被害を受けているが、若枝も伸び樹勢は良好である。樹高一九m、胸高幹周り七・二八mの巨木である。東側にあるヤブツバキは鬼椿と称され、六月一日に鬼椿祭が行われている。



観音寺跡のスタジイ

指定 平成十一年四月三十日

所在地 いわき市小川町柴原字館下

所有者 個人

観音寺は修験宗羽黒派の寺院で、四倉狐塚の善行院の末寺であったが、明治五年（一八七二）の修験宗廃止令によって廃寺となった。現在境内には、観音堂と稲荷神社が残されている。行屋の敷地は廃寺のとき、柴原の遍照寺の所有地となった。

スタジイはその境内にあり、樹高一八・五m、胸高幹周り六・二〇mの巨木である。植栽されたものか自生木なのかは不明であるが、一般に常緑の樹木は聖なるものとして敬われ、大切に保存されてきたものが多い。

スタジイはブナ科シイ属の常緑高木で、幹は上部でよく分枝するため、こんもりとした円みのある樹冠を形成する。樹皮は黒褐色で、縦方向に深く裂ける。葉は互生し長さ一cmくらいの柄があり披針形、先端は鋭尖形、厚い皮質で表面光沢があり葉裏面は灰褐色である。花期は五月下旬から六月で、堅果は卵状長楕円形である。暖帯の樹木で、暖かさ指数八五以上の地域に生育し、宮城県南部まで分布する。

観音寺跡は、シイ・カシ帯の最も内陸部に入ったところで、自生であれば小川町の丘陵地帯の潜在植生を推定する上で大変貴重なものである。このスタジイと共に、現在残されている供養塔や墓石は、江戸時代における修験宗寺院と村人の信仰形態を知る上で貴重な資料である。



諏訪神社のシダレザクラ

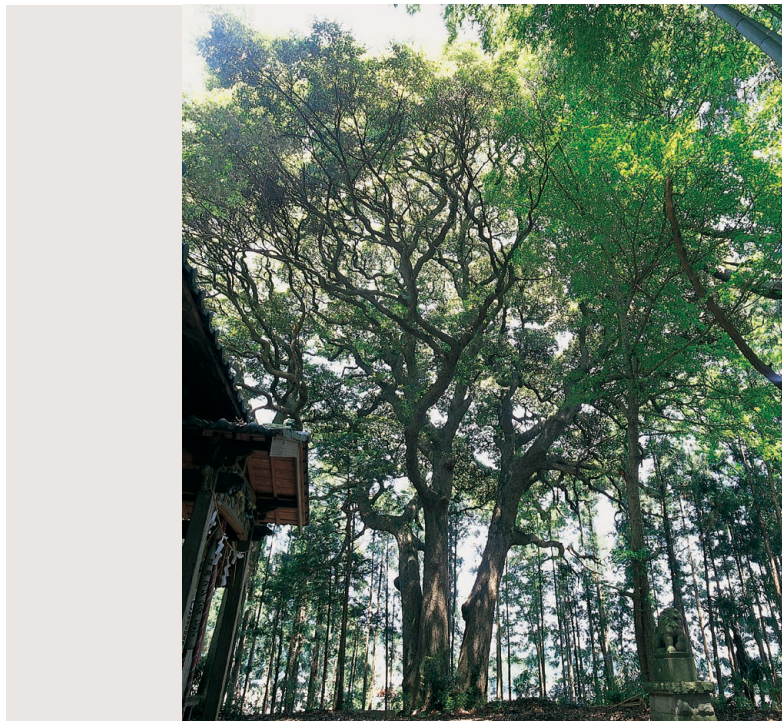
指定 平成十一年四月三十日

所在地 いわき市小川町高萩字家ノ前

所有者 諏訪神社

このシダレザクラは諏訪神社の境内にあり、樹高一・五m、胸高幹周り三・六〇mの巨木である。諏訪神社は約六五〇年前に建てられたとい伝えがあり、このシダレザクラの樹齢もほぼそれに近いものと考えられる。老樹のため枯れ枝が目立つが、開花時の美しさで市民に親しまれている。昔は樹高が現在よりも高かったといわれているが、上部の枝が枯れ、現在の高さとなっている。

シダレザクラは、枝の垂れないエドヒガンの中から枝が垂れる変異種が生じ、それが観賞用に栽培されるようになったものであるが、学名上はシダレザクラが母種になっている。それは、日本のサクラを研究したマキシウィッチが、エドヒガンより先にシダレザクラを研究し、*Prunus pendula Maxim.* の学名を与えたからである。その後、牧野富太郎博士や大井次三郎博士によりエドヒガンが研究され *Prunus pendula fromascendens* の名が与えられた。種小名の *pendula* は「垂れる」の意味である。葉や花の形質はエドヒガンと変わらない。葉は長楕円形から狭倒卵形で、先端が尖り重鋸歯縁である。葉基部に一对の密腺があり、葉柄には毛が密生する。花は淡紅色で、花柄には開出毛を密生する。果実は球形で、六月には熟して黒色になる。



八幡神社のスタジイ

指定 平成十一年四月三十日

所在地 いわき市渡辺町田部字清水

所有者 八幡神社

八幡神社は小高い丘の上に建てられており、口伝によると、神社の創建は平安時代末期といわれている。境内周辺はスタジイやアカガシなどからなる照葉樹林となり、自然林をそのまま境内林として利用したものである。一般に、暖かさ指数八五以上のところはスタジイ・アカガシ・ウラジロガシなどの照葉樹林が生育する地帯とされている。八幡神社のある渡辺町は暖かさ指数八五以上の地域で、昔はスタジイやカシ類などの照葉樹で被われていたものと考えられ、その林の一部が境内林として残されたものである。

この境内林の中に、樹高二四・五m、胸高幹周り六・四〇mのスタジイの巨木がある。上平窪のシイノキ群（県指定）の中にもこれ以上の巨木はなく、いわき市内で最も大きい。地面から二mのところまで二俣に枝分かれしている。斜面の上部に生育しているため、樹の境内側は落ち葉などで、根元が埋まって二本のように見えるが、斜面の下から見ると一本であることが分かる。渡辺町周辺の潜在植生を推定する手がかりとして貴重である。

堅果^{げんか}は秋に熟し、卵状長楕円形で長さ二二～二二mmのドンダリを落とす。



下桶売の種まきザクラ
しもあげのたね

指定 平成十二年四月二十八日

所在地 いわき市川前町下桶売字城木坂

所有者 個人

この種まきザクラは、樹高二・〇m、胸高幹周り三・七五mの巨木で、樹種はエドヒガンである。樹皮は暗灰褐色で、ふぞろいな浅い縦の割れ目がある。葉柄は長さ二・二・七mで毛が密生し、葉身は長楕円形から狭倒卵形、先端は鋭尖形、基部に一对の密腺があり、縁は重鋸歯状である。花期は五月で、いわき市の平地のものより約二〇日遅れる。花柄は長さ一・一・四cmで開出毛を密生する。花弁は楕円形で淡紅色である。果実は球形で六月に熟して黒色になる。枝は垂れることはない。シダレザクラ（イトザクラ）は本種の枝垂れ形につけられた名称であるが、学名上はエドヒガンがシダレザクラの品種になっている。

エドヒガンの開花は稲の播種時期とはほぼ一致するので、現在のような太陽暦がなかった時代は、稲の種まきの目安とされていた。

いわき市内で、エドヒガンを種まきザクラとして稲の播種時期の基準としている地域は、大久・遠野・川前などがある。現在、自生のエドヒガンは森林伐採などの影響で個体数が少なくなっている。この種まきザクラも播種の基準とするため植栽されたものと考えられ、地域農家の生活と密接な関わりをもって保護されてきた貴重な桜である。



常福寺の龍燈杉

指定 平成十四年四月三十日

所在地 いわき市平赤井字赤井嶽

所有者 常福寺

関ヶ原の中腹に常福寺(関ヶ原薬師)がある。境内の南東斜面に、通称「龍燈杉」と呼ばれている巨木があり、霊木として崇められている。樹高四二m、胸高幹周り九・二四mのこの巨木は、樹高八mのところにヤブツバキの寄生木や、幹に雷の被害跡があるが樹勢は旺盛で、樹高・胸高周囲では、いわき市内の杉の中で最大である。

この杉には、昔、竜宮城の乙姫様が難産の折、薬師如来の御利益を得て安産したお礼に、毎夜龍燈を仁井田浦から献じ、この大杉から一段と光彩を放して薬師堂へ入ったという龍燈伝説がある。

阿武隈山地地層の花粉分析の結果、最終氷河期が終わり、気候が温暖になる時代から、スギの花粉が多く検出されている。このことから、昔は阿武隈山地にスギが自生していたことが窺われる。しかし、人間活動が盛んになるにつれてスギの伐採が進み自生林はほとんど無くなってしまった。旧営林署が行った赤井嶽の調査報告(一九六三年)では、龍燈杉を含め旧参道のスギとヒノキは自生のものとされた。太平洋側のスギの自生林が無くなってしまった現在、龍燈杉と参道のスギ林は植物地理学上貴重である。

寺の伝承によれば、江戸時代末期まで、寺の境内には数本の巨木があり、その中に老爺杉・老婆杉・天狗杉・龍燈杉があったと云う。また、「龍燈杉は杉にあらず」とも伝えられており、現在残っているスギの樹形から見て天狗杉の可能性があるが、一般に龍燈杉と敬われている。



大久川産クビナガリユウ化石^{おおくわさん}

指定 平成十七年四月二十七日

所在地 いわき市常磐湯本町向田

(いわき市石炭・化石館内)

所有者 いわき市

上部白亜系双葉層群は、いわき市四倉町玉山付近から双葉郡檜葉町にかけて分布し、下位より足沢層、笠松層、玉山層に分けられるが、なかでも大久川流域に分布する玉山層は、昭和四十三年にフタバスズキリユウ(二〇〇六年新属新種フタバサウルス・スズキイとして正式に研究チームの論文に記載された)が発見されたことで知られる。その後もクビナガリユウ化石をはじめ、海生爬虫類、魚類、軟体動物など多くの貴重な化石が発見されている。

玉山層は、下部では礫を含む中・粗粒砂岩、上部は中・粗粒砂岩からなり、その最上部層にクビナガリユウをはじめとする化石を多産する化石層が数層存在する。層準とは、地質層の区間のことである。

この大久川産クビナガリユウ化石は、平成十三～十四年に日本テレビで制作・放映された「ザ・鉄腕ダッシュ」において発掘・^{発掘}作業が行われ、後に本市に寄贈された化石群の中のクビナガリユウ化石資料である。この中には、ほぼ完全な左大腿骨や坐骨、指骨などが含まれる。産出層準が同じであることなどからフタバサウルス・スズキイと同種との推測もできるが、同定の決め手となる頭骨などの部位ではないため、現況では属・種未定のクビナガリユウ類とするにとどまる。この化石群は、海生爬虫類をはじめ、様々な化石が混在する化石密集層からの産出であり、堆積環境と当時の生物相を考察することが可能であるとともに、幼体の部分骨を含むことから、クビナガリユウの成長過程を知る有効な手がかりとなる資料であることなどが重要である。



下三坂の種まきザクラ

指定 平成十八年三月二十四日

所在地 いわき市三和町下三坂字日向・永久保

所有者 財務省ほか

県道より小高い下三坂の共同墓地内に生育しており、周辺に支障となる樹木もないことから枝張りもよく、バランスのとれた樹形が特徴である。周囲が墓地や畑であることから踏圧の害もなく、樹勢も良好である。

地上1・2mの幹回りが四・九三m(胸高直径一・五七m)という数値が示すようにまれに見る巨木であり、市街地より遅い花期には葉の展開に先立って咲く薄紅色の花で周囲が明るくなるほど見事な景観を呈するという。

地元では種まきザクラ(稲作)として、この花が咲く頃に苗床に稲の種子を蒔く目安にしていたという。農業を営んでいくうえで生活に密着して利用鑑賞されてきた歴史的意義が高い。

市内には他にも「下桶売の種まきザクラ(市指定)」など種まきザクラといわれるザクラが点在している。森林や圃場・道路開発などが進む中、地域で保護され守られてきたと考えられる。今後も、利活用と合わせて保全されることが望ましい樹木である。エドヒガンは長命の桜で、天然記念物に指定されている名木や巨木が多い。葉が展開する前に開花し、がく筒がまるくふくれ、上部がくびれて壺形になることが特徴である。変種としては、枝がしだれる性質をもつ「諏訪神社のシダレザクラ(市指定)」なども存在する。